

夏ならではの七夕

七夕は、五節供のひとつです。

今日、七夕といえは、牽牛星（彦星）と織女（しよくじよ）星（織姫）が一年に一度だけ天の川で再会できるロマンティックな日、とされます。これは、紀元直後に中国ではじまった「星まつり」（乞巧奠きっこうでん）にちなんだもの。それが、奈良時代に日本に伝来したところで、まずは貴族女性たちが、織姫にちなんで技芸の上達を星に祈った、といえます。

行事が大がかりになるのは、江戸時代のころ。江戸城の大奥では、女中たちが色紙や短冊に歌を書いて葉竹に結び、供物とともに品川の海に流すのが定例となりました。古来日本に伝わる節季せつきの厄払いと中国伝来の星まつりが習合した、とみることが出来ます。やがて、それが江戸市中にも伝わり、そこでは、歌でなく願い事を短冊に書くようになったのです。

一方で、盆行事とのつながりもみられます。祖霊まつり（七月一五日）の前七日間は、嚴重な物忌ものいみをしなければなりません。七月七日は、そのかかりの日で、穢けがれや厄災を祓はらう行事日とされたのです。ところによつてはナヌカボン、ボンハジメなどとも称されました。ネンブリナガシ・ネブタナガシなどという呼称も全国的に分布します。柳田國男は、これらの語源は「ねむり」（睡魔）であろう、とします（論考「眠り流し考」）。そして、それはネム（合歡）の木で象徴され、ネムの木流しがはじまりだっただろう、といえます。古い七夕流しのかたちで、穢けがれや邪気を、ネムの木や葉に託して流すのです。このネブタ流しは、人形流しにも、また、燈籠流し（燈籠送り）にも通じます。牽牛星と織女星の再会が叶うように、と仮設の棚に供えものをする習慣も伝わります。これをオトタナ（乙棚）とかオトタナバタ（乙棚棧）といい、そこでの供えものは、ナスや

キュウリなどの夏野菜です。ここにも、盆棚との混同がみられます。が、いずれも限られた夏野菜に頼らざるをえなかったのが道理、とみておきましょう。

なお、七夕には、他の節供のように、節供料理というほどの定型化がみられません。それは、旬の食材が不足する上に、保存もききにくい時期だからでしょう。たとえば、他の節供にみられる薬酒に見立てた酒が七夕にだけは見当たらないのです。日本特有の夏場の高温多湿が酒の醸造や保存に適さなかったからでしょう。